



びこんだ。

川岸では、黒い人影が、おれたちに向かって、しきりに手をふり、なにことかわめいている。きつと村の者だ。もしかしたら、ジロのおとうかもしれない。おれはうれしくて、水をかいて泳いでいる手足がもどかしくて、しかたがなかった。おれたちは、ようやく岸にはいあがった。と、そのときだ。

「おまえたち、だれだ。」

向こうからさげんだ。

「おれたちだ。タロと、ジロだ。」

「なにっ、タロ、ジロ……」

あいては、いっしゅんはっとして、おれたちをみつめた。

「あっ。」

おれもジロもおもわず、さげび声をあげて川岸につっ立った。まるで、気でも転倒しそうだった。おれたちの前に立っていたのは、おれたちの村では、ついぞみかけない、しかも腰には毛皮ではない、ヒラヒラするうすいものを巻きつけた男だったからだ。

ワンワンワンワン

いきなり、ベケが、もうれつな勢いでほえかかった。

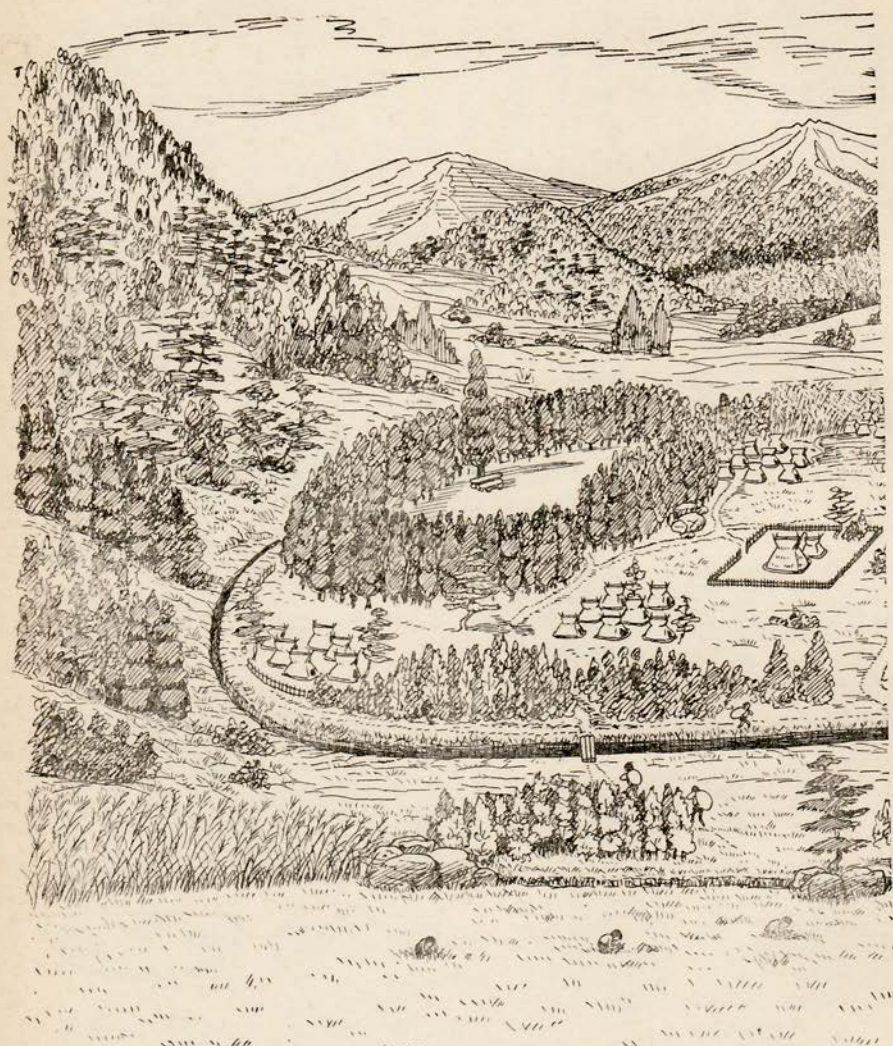
「うわーっ。」

あいては、悲鳴をあげて、いっしゅん、うしろにとびのいた。ベケは、



いハシゴを伝ってのほ
る。床が高いのは、風
の通りをよくして、く
さりやすい米を、うま
くたくわるためだそ
うだ。

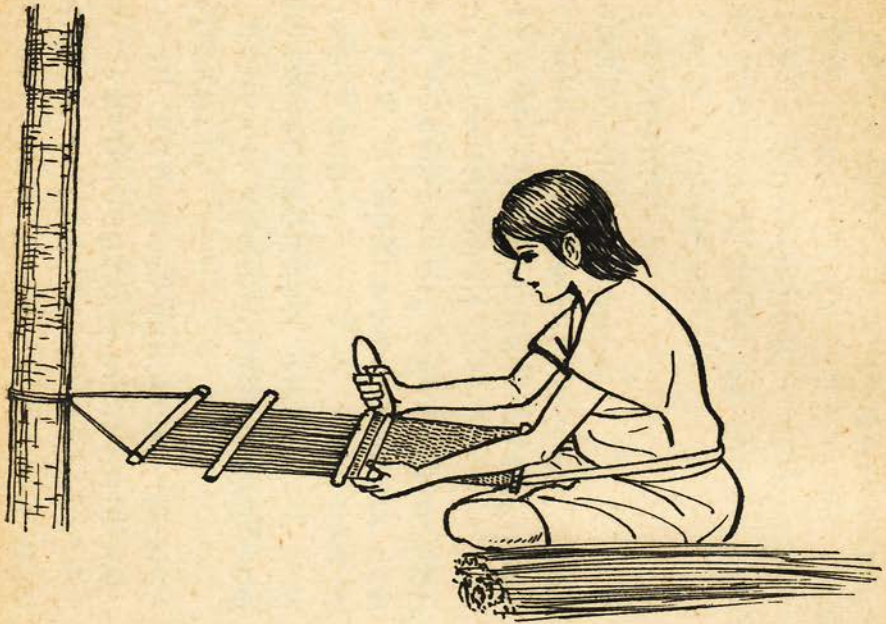
しばらくたつと、お
れもジロも、すっかり
村になれ、村の人氣者
になってしまった。そ
れというのも、おれは、
じまんじゃないが、川
の魚があいてのホコ突
きにかけちゃ、だれに
だって負けないし、泳
ぎだって、おれほどな
がく水の中にもぐれる
者は、おとなにだって
そうざらにはいない。
ジロは、鳥よせにかけ



ちゃ、これこそたいしたものだ。おれたちはこのとくいちゅうのとくいを、ぞんぶんに発揮して、この村の人たちのどきもをぬいた。

しかし、おれやシロにとっても、この村の生活はおどろきの連続だ。おれたちは、人間が、この村のほかにも、いろいろな土地に、いっぱいいることも、はじめてしまった。タケルは、おれたちに、こういった。

「この広い土地には、この村のほかにも数えきれないほどの村と、そして、いろいろな生



備もある。そのカマの中に、いちどにたくさん入れ、焼きあげる。

おれたちの村の土器の色が、そろって茶褐色ちやくしよくなのに比べて、この土器は、もっと明るい黄褐色おうかくしよくだ。

すべての点で、この村は、おれたちの村より、ずっと進んでいる。

ところが、ここで、おれたちは、さらに、もっとびっくりするような、できごとにあった。それは、ちょうど、おれたちがこの村へやってきてから、だいぶたった、ある日のことだ。

おれとジロは、ハナコや、村のこどもたちといっしょに、稲田にバッタをとりにでかけた。バッタは、稲をたべる悪い虫だ。だが、こいつは、つかまえてかけ干しにして食うと、とてもうまい。だから、村の者は、男も女も、年寄りやこどもも、ひまさえあると、このバッタとりをやる。とにかく、このバッタときたら、それこそ数えきれないほどたくさんいる。そいつらが、みんなで稲を食いあらずんだから、たまったもんじゃない。

稲田いなだは、もともと、しめった土地だから、ズブズブ足がぬかる。それでもおれたちは、そんなことにおかまいなく、